

# 淡路島のヒメハルゼミについて

登 日 邦 明

ヒメハルゼミ *Euterpnosia chibensis* Matsumura は、南方系昆虫類の代表的なものの1種であり、本邦では、新潟県能生および茨城県片庭を北限として、それ以南の暖地のシイなどを主体とした照葉樹林に点々と分布し、合唱性を有し大声で鳴くことから、古くから注目されていた種であった。

淡路島産のヒメハルゼミが初めて記録されたのは1933年(昭和8年)のことで、当時洲本町(現在の洲本市)7丁目に住まれていた川原忠雄氏が、「昆虫世界」37巻11号に「ヒメハルゼミの新産地」なるタイトルで、三原郡八木村馬廻(現在の同郡三原町八木馬廻)産のものを報告している。これは県下で最初の報告でもあった。報文の一部を引用すると、「右は生徒が淡路島三原郡八木村馬廻で蜘蛛の巣にかかっていた♀一匹を採集したものであります。来年度の発生時には詳細を調査の上、追って発表します」とある。しかし、その後の報告は見られず、2度目の記録が公にされたのは、38年後の1971年のことである。

神戸大学の奥谷禎一教授は、従来より県下の本種の分布を調査されていたようで、淡路島での分布についても深い感心を示され、当時、農学部にて在籍しておられた武田義明氏(現在教育学部技官)などに調査を依頼されたり、また、先生御自身も、最初の発見地である八木馬廻などへ何度か足を運ばれたようである。これらの成果が実り、1971年7月に武田氏が島南部の諭鶴羽神社社叢で本種の鳴声を聞き、7月29日には奥谷先生自ら現地へ来られて生息を確認された。この再発見の経緯については、奥谷(1971)堀田(1971)などに詳しい。

筆者は、1972年7月に諭鶴羽神社の南西およそ6 Kmの三原郡南淡町阿万通称ショウブ谷で、蛾類の燈火採集を行った際、飛来した本種を発見し(登日、1973)、その後1975年7月には、洲本市三熊山で鳴声を確認した(登日、1975)。それ以来、機会をみて全島的な調査を試みたいと考えていたが、発生時期が短期間であることも加わって実行できなかったが、本年7月上~下旬に島内各地で分布調査を行なう機会に恵まれ、若干の新知見も得たので、現時点での淡路島での分布のまとめの意味で、本報を公にしたい。

本文を草するに当たり、適切な助言を下された神戸大学農学部の奥谷禎一先生、日頃より何かと御支援をいただく堀田 久・竹田俊道両氏に、厚くお礼申し上げます。

## 島内に於ける分布と生息環境

### 洲本市

1. 先山山頂付近及び南東面（東茶屋～中腹、alt. 200～400m）梶田（1976）\*青雲中学の生徒が、1♀を採集した。合唱も確認している。

脱皮殻は頂上の東茶屋付近でも見られるが、鳴声はあまり聞かれず、南東面の中腹（alt. 200～300m）で合唱を確認した。

頂上から南東山の下内膳にかけては、帯状にスタジイ、タブを主体とした自然林が残存しており、特に中腹あたりが主な生息地となっているようである。生息数は2～3コロニーで、三熊山より多い。

2. 三熊山北面（alt. 20～80m）

登日（1975）先にも触れたように、1975年7月に合唱を確認。

三熊山は、淡路島の中心・洲本市の背後にある130mあまりの低山であるが、北面には比較的保存状態の良好なスタジイ、イヌマキ、クスノキ、ヒメユズリハなどを主とする自然林が残されており、島内での暖地性植物の宝庫とも呼ばれている。この北面が生息地となっており、毎年7月上旬～中旬には合唱が聞かれるが、推測される個体数は1コロニー数10頭程度で、極めて小規模である。

### 三原郡

3. 諭鶴羽山山頂付近及び南面（alt. 200～600m）

奥谷（1971）先にも触れたように、山頂直下の諭鶴羽神社社叢で生息を確認。1933年来の発見となる。

諭鶴羽山の山頂直下には諭鶴羽神社があり、その背後に社有林としてアカガシ、スタジイ、ミヤマシキミを主とした植生が残存している。再発見された当初は、この林だけが生息地とされており、筆者も、1974～75両年の7月下旬に調査した際には、合唱はここでしか確認できなかった。

ところが、本年（1978）7月10日に調査した際には、神社の周辺はもちろん、東に延びる尾根筋一帯、さらには南斜面（特に南淡町灘黒岩方面）の中腹以上一帯で、夥しい数の本種の合唱（5～6コロニー以上）を確認した。まさに山全体が唸っているようであった。生息数、生息面積共に、島内では最大である。

\* この項で示した文献は、最初に発表されたオリジナルな報文のみである。

この山での発生のピークは7月10日前後のようで、現在までの調査が7月下旬の発生の終末期近くになってから行なわれていたために、この付近では最も標高の高い諭鶴羽神社付近でしか確認できなかったのではないかと考える。今後の課題として、尾根筋や南面中腹での脱皮殻の確認が望まれる。

#### 4. 南淡町灘大川(大川の滝周辺、alt. 60m)

従来記録がなかったが、本年7月10日に調査した際に、1コロニー数10個体程度の合唱を確認した。

この付近には、ウバメガシを主体とする暖地性の海岸林にスタジイなどを交えた植生が残存している。

#### 5. 南淡町阿万上町(通称ショウブ谷、alt. 100m)

登日(1973) 燈火に飛来した1♂を採集。合唱も確認。

上記の地点は本庄川上流の谷の1つで、先の諭鶴羽山からは南西へおよそ6 Km、灘大川からは北へおよそ3 Kmの位置になる。スギ、ヒノキ等の植林が多く、生息環境は良好でなく、奥谷先生の御意見\*のように、他の場所で発生したものが、移動してきたのではないかと考えられる。

その他として最初の発見地である三原町八木馬廻周辺では、奥谷先生の調査(奥谷、1971)でも生息が確認されておらず、筆者も馬廻の成相寺の寺有林をはじめ、成相川の上流まで調査を行ったが、ついに確認できなかった。

本種の分布は、スタジイを主とする照葉樹林の分布と深い関連をもつようであるが、馬廻の成相寺周辺のスタジイの自然林は、成立年代が比較的新らしいのと規模も少し小さ過ぎるようである。脱皮殻も確認できなかったことと周囲の環境が1933年来あまり大きく変化していないことと合わせて考えると、川原(1933)が報告した個体は、他の場所(たとえば諭鶴羽山)で発生し、移動してきたものである可能性が強い。さらに、生息の可能性のある候補地に上げておいた西淡町阿那賀の春日神社社(alt. 10~20m)もかなり時間をかけて調べたが、鳴声・脱皮殻共に確認できなかった。南淡町賀集の淳仁天皇陵(alt. 10~20m)同様であった。

これらの地には、いずれもある程度の面積のスタジイを主とする自然林が残存しているのに、なぜ本種が分布しないのか大変興味のあるところである。樋熊(1967)の論じているように、縄文海進時に本種が分布を拡大したと考えるならば、当時標高の低いこれらの地は海底に没していたために、分布しないと云うことになるようであるが、これらの問

\* 本年(1978)8月にお会いした際の会話。

題は今後、本種の分布と深い関連をもつチキコオロギなどの分布と併せて、種々の面から考察したいと考えている。

文 献 ( 淡路島関係のみ )

- 1) 朝 日 稔 ( 1973 ) 南淡路地域の動物相、淡路島南部地域学術調査報告書：75～84。(兵庫県)
- 2) 堀 田 久 ( 1971 ) 淡路島で再発見されたヒメハルゼミ、PARNASSIUS (8) : 11.
- 3) ————— ( 1974 ) 淡路島産のセミについて、PARNASSIUS (12) : 13-14.
- 4) ————— ( 1976 ) 先山のヒメハルゼミについて、PARNASSIUS (15) : 13.
- 5) 川 原 忠 雄 ( 1933 ) ヒメハルゼミの新産地、昆虫世界 37 (11) : 27-28.
- 6) 奥 谷 禎 一 ( 1971 ) 兵庫県にヒメハルゼミを訪ねて、昆虫と自然 6 (9) : 12.
- 7) ————— ( 1974 ) 兵庫県の動物界の現状 ( 続 ) 兵庫県の混虫類、兵庫県の自然の現状 II : 49~67 ( 兵庫県 )
- 8) ————— ( 1976 ) 県下のセミ、新兵庫の自然 : 41~43 ( のじぎく文庫 )
- 9) 登 日 邦 明 ( 1973 ) 燈火に飛来したヒメハルゼミ、PARNASSIUS (9) : 2.
- 10) ————— ( 1975 ) ヒメハルゼミの新産地、PARNASSIUS (15) : 13
- 11) ————— ( 1975 ) 淡路島産の昆虫について、兵庫県の自然 (12) : 11-13. ( 兵庫県自然保護協会 )
- 12) ————— ( 1976 ) 淡路島の珍しい昆虫、新兵庫の自然 : 196-198.
- 13) ————— ( 1978 ) 淡路島の昆虫とその現状、鳥と自然 (8) : 10-12. ( 兵庫野鳥の会 )